



がんの漢方治療①

修琴堂大塚医院 渡辺 賢治

前号では、がんは発見されるよりもずっと前からカラダの中に存在していること、その増殖速度は細胞分裂の時間で決まるけれども、小さいうちは急に大きくなるものではないこと、したがって治療方針の決定は十分に納得してから受けること、を述べました。

あらためて、がんの治療の主役は西洋医学の標準治療であることは強調しておきたいと思います。つい先日67歳の男性で「肺腺癌の手術を勧められているが、もう年だから手術などしたくない」という患者さんが来院されました。画像を見ると2cmくらいで、ご本人も体力十分です。胸腔鏡でそれほど負担がなく切除可能だと思いき、というお話をして、慶應病院を受診していただきました。結果として、胸腔鏡の手術で体に負担なく手術を終えら

れ、感謝されました。現在は再発予防の漢方薬を継続中ですが、「手術が嫌で漢方医を受診したのに、逆に手術を勧められた」とい、いつも笑顔で冗談を言っておられます。初診時は「もう年だから何もしない」とおっしゃっていたのですが、最近では「100歳まで行きたい」とおっしゃられますので、「漢方で全面的に支援します」と申し上げています。

がんという診断が下つたら、まずは標準治療をすべきと考えますが、それだけで十分でないことも現実です。実際に、がん死はいまだに年々増加の1途を辿っています。

そこで患者さんはさまざまな他の方法を求めます。大塚医院にもがん患者さんは数多く受診されます。今回から「がんに対して漢方で何ができるか」

について書きます。

漢方で免疫増強を まず考える

がんのどの段階でも漢方治療は有効です。大きく分けるとその役割は、①免疫増強 ②手術後の回復補助、③化学療法・放射線療法の副作用軽減、④再発予防・転移予防、⑤生活の質(QOL)の改善、となります。

①免疫増強

これは、がんのどの段階でもやるべき治療です。がんと闘う手段は化学療法や放射線治療だけではありません。本庶佑先生が2018年にノーベル賞を受賞された免疫チェックポイント阻害剤が如実にそのことを証明しました。がん細胞は、生体のリンパ球か

ら攻撃を受けないようにブロックしてありますが、免疫チェックポイント阻害剤はそのブロックをはずしてしまします。その結果、リンパ球はがん細胞を攻撃することが可能になり、進行したがんが劇的に縮小します。がん細胞そのものを攻撃する抗がん剤と異なり、自分が持つリンパ球を、最大限に働けるようにするだけで、がん細胞が劇的に死滅するのです。免疫を増強することだけで、がん細胞にかなりダメージを与えることが示されたのです。

漢方には免疫を上げるものが沢山あります。漢方単独で治療を行う機会はそう多くないのですが、高齢などの理由で手術を受けたくない、という患者さんがいらつしやいます。そうした患者さんには、いつでも手術ができる状態において、漢方薬だけで様子を

見ることがあります。中に長年腫瘍が増大しない、もしくはがんが消えてしまいう人がいます。発育の遅い肺がん、乳がん、悪性リンパ腫などですが、あくまでも早期であり、何らかの理由で手術や化学療法ができない、もしくはもう少し様子を見たい、という人に限ります。

なぜ早期が重要かという点、画像で見るとがんは平面ですが、実際には立体です。サイズが倍になると2×2×2で実際には8倍になります。がんの進行に伴っても増殖速度が変わらないと仮定すると、1cmの大きさが2cmになる速度と10cmの大きさが20cmの大きくなるのは同じ期間です。1cmのがんと10cmのがんでは細胞数は10×10×

10で1000倍違います。漢方に限らず、相手が少ないうちに治療を開始した方が有利です。

免疫増強の漢方薬でよく使うのは、補中益気湯、十全大補湯などの漢方薬です。これに抗がん生薬である半枝蓮、白花蛇舌草、靈芝、冬虫夏草、カワラタケ、それに薬用人参を長時間蒸した紅参、などを使います。

しかし、免疫増強をしたくても、体力が弱りきっている患者さんでは薬が効果的に働きません。そういう場合には、基礎体力を回復するところから始めます。例えば抗がん剤が終了して、体重が10kg減少し、基礎体力が落ちきってしまったよう

な患者さんの場合、茯苓四逆湯、人参湯などで、まずは基礎体力を回復させることを優先します。その後、四君子湯、六君子湯などで、徐々に体力を回復させながら、最終的に補中益気湯などに行き着くように、段階的に処方を変化させていきます。

免疫を上げる漢方薬とともに、免疫を下げる要因を取り除くことも、漢方治療の重要な役割です。ストレス、自律神経の乱れ、冷えなどは免疫を落とすので、まずはそこから正します。主治医からあまり説明がないままに、抗がん剤をやることに同意したものの不安が募っている、という患者さんには抑肝散や抑肝散加陳皮半夏、加味逍遙散といった

薬で、まずは気持ちを楽にします。自律神経の乱れが強い場合には柴胡加竜骨牡蛎湯や桂枝加竜骨牡蛎湯などで整えます。冷えが強い場合には附子を加える、もしくは真武湯を処方します。

こうしてからだを立て直すことで、手術や化学療法などに耐えられる体力がついてきます。いろいろと処方並べ立てて大変申し訳なく思いますが、がんという病気ではなく、がんと闘うからだを強める漢方治療は、からだの状態を見ながら適切な薬を選ぶことで、結果的に最大の免疫増強ができるように治療を考えていくのです。次号も、がんの漢方治療を書かせていただきます。



わたなべ けんじ
渡辺賢治

慶應義塾大学医学部卒。慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室に国内留学後、米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学。帰国後北里研究所(現北里大学)東洋医学総合研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、1931年に開設された漢方専門医院、修琴堂大塚医院院長に就任。横浜薬科大学特別招聘教授、慶應義塾大学医学部漢方医学センター客員教授、奈良県顧問、神奈川県顧問、漢方産業化推進研究会代表理事、日本臨床漢方医会副理事長、WHO医学科学諮問委員、WHO伝統医学分類委員会共同議長等を兼ねる。1900年以来、西洋医学のみだった国際疾病分類の、第11改訂(2019年)に、伝統医療が初めて取り入れられたが、2005年からプロジェクトの共同議長として長年尽力。主な著書に『漢方医学 同病異治の哲学』(講談社学術文庫)、『未病図鑑』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)、『漢方で感染症からカラダを守る』(ブックマン社)など。



渡辺賢治先生の近著「未病図鑑」